

新しいから新語, 旧知だけど新語



森口 稔

国語辞典の2人の先達、見坊豪紀と山田忠雄の友情と決別を描いた、佐々木健一『辞書になった男』(文藝春秋)は、新語についての見坊氏の話を紹介している。

「長年の用例採集の実績から、ケンボー先生は大体、平均して一日に三つは新語が生まれると話していた。」(表記は原文通り)

日本語と英語を単純に比較することはできないが、2006年に出版された『ジーニアス英和辞典』第4版から約8年。仮に英語でも1日に3語が生まれるとすると、今回の第5版が出版されるまでの間に9,000語近くの新語が誕生したことになる。

では、なぜこんなに次々と新しい語が生まれるのか。その理由はおおまかに2つあるのではないかと考える。

1つは、新しい事物。それまで存在しなかった事物が発明・発見されたり、他の文化から導入されたりしたとき、それを指す言葉やそれに関連する言葉が生まれる。1980年代半ばまでInternetという語は存在しなかったし、西洋が日本文化と接触する前はsoyという英単語もなかっただろう。第4版以降の目まぐるしい社会の変化が、第5版に掲載された新語に現れている。

たとえば、ringとanxietyから合成された単語ringxiety。混雑した車内で電話の呼び出し音が聞こえたとき、自分の携帯やスマホが鳴っているのではないかと思うときがある。そのときの不安と期待と羞恥が入り混じったような感覚。「着信不安、着信願望」と訳してみた。voice lift。近頃、顔のしわをなくすりフトというプチ整形が

女性の間で話題になっているらしい。見た目だけではなく、声も若くしたいということだろうか。「声帯の若返り手術」という訳を与えている。

新語が生まれるもう1つの状況は、事物自体はしばらく前から存在しているにもかかわらず、それに名前がついていない場合である。

たとえば、「無理」とか「嫌だ」と文句を言いながらも、最終的には、困難な仕事をなんとかこなしている人たちがいる。この優秀なのか不平家なのかわからない人たちのことを最近の英語ではstress puppyと呼ぶらしい。

恥ずかしかったり、がっかりしたとき自然と手で顔を覆ってしまう。これは日本文化だけではないようだ。おそらくは昔からやってきたその行為を1語で表す新語が出てきた。faceとpalmの合成語、facepalm。単純すぎて、なぜ今までこの単語がなかったのか、不思議に思えるほどである。

1日に3語の新しい言葉が生まれているとしても、それらがすべて生き残るわけではない。生まれてすぐに死んでいく語もあれば、華々しくデビューした後で一瞬で消えていくような語もあるだろう。その中で生き残り、社会に認知され始めている単語たちを今回は収録したことになる。単語が生まれて辞書に載るまでは、人間に譬えれば、幼児期から学生時代を経て社会に出るまでの時期のようなものだろうか。立派な社会人として、それぞれの単語を世に送り出す。その卒業証書を渡す役割を果たすのが辞書なのかもしれない。

(もりぐち みのもる・長浜バイオ大学非常勤講師)